




#### 4 果 樹

項 目	作 業 内 容
( 1 )温州ミカンの浮皮軽減	<p>( 今月の作業のポイント )</p> <p>温州ミカンの浮皮軽減            極早生、早生温州ミカンの収穫            極早生・早生温州の秋肥施用            キウイフルーツの収穫</p> <p>1ヶ月予報では、今後降水量が多い(9月23日高松地方気象台発表)見込みである。温州ミカンでは、台風15号の降雨の影響がすでに懸念されており、果実品質を高める管理に努める。</p> <p>温州ミカンでは、秋季の高温と降雨による浮き皮の発生が問題となっている。樹、園地によりバラツキがあるので、特に注意しておく必要がある。</p> <p>浮皮の原因は果肉の発育が停止するのに対し、果皮の発育は継続するため果皮と果肉が分離し、すき間を生じ皮が浮き上がるため、高温、多雨、窒素過多で助長される。そのため、発生しやすい軸の太い上向きの大玉果などは摘果し、発生が少ない果梗枝が細く下垂した果実を残すようにする。</p> <p>また、浮皮軽減対策として、10月から収穫までにカルシウム剤を2～3回散布する。なお、フィガロン乳剤を利用する場合は、蚩尻期(1～2分着色)とその2週間後に2,000～3,000倍を散布する。摘果剤として使用した園地、樹勢の弱っている園地では使用しない。</p>
( 2 )柑橘類の仕上げ摘果・樹上選果	<p>収穫間近となっている温州ミカンでは、樹上選果で商品性のない果実を除去する。普通温州で、後期重点摘果を行っている園では、10月中旬を目安とし、果皮表面が滑らかになり光沢を持つようになってから仕上げ摘果を行う。仕上げ摘果は、品質の良い下垂枝に着果した果実を残し(葉果比25～30)上向きの大玉果、日焼け果で著しいキズがついた果実などを除去する。着果が少ない樹では、仕上げ摘果は行わず、樹上選果で加工品を摘果する。</p> <p>中晩柑類は摘果で見落とした直花果、日焼け果、腰高果、果梗枝の太い極大果、極小果、傷果などを除く。着果が少ない樹では最終的に樹上選果を行って、着果調整をする。</p>

項 目	作 業 内 容
<p>( 3 ) 極早生、早生温州ミカンの収穫</p>	<p>ここ数年温州ミカンは樹、園地によって生育にバラツキが大きいので、分割採収による品質の均一化を図るなど細やかな収穫をしなければならない。そのためには、以下が重要である。</p> <p>ア 樹上選果による加工品の摘果  イ 樹勢に対応した適正着果量の確認  ウ 着果の少ない樹では、樹上選果のみでの調整</p> <p>マルチ栽培園地だけでなく、全ての園地で定期的に果実分析を行い、着色、糖度、クエン酸を十分にチェックしながら、食味を第一に考え、品質基準に達した果実から収穫する。なお、採収前には貯蔵病害防止の薬剤の散布を徹底し、腐敗防止に努める。</p>  <p>写真1 温州ミカンのマルチ園</p>
<p>( 4 ) 完熟栽培の取り組み</p>	<p>早生温州ミカンの完熟栽培は冬季に寒害を受けない園地で行う。完熟にする果実は内成りやすそ成り、あるいは下垂枝に着果した2S～M果とし、隔年結果を防ぐため果実全体の15%以内とする。収穫は11月下旬～1月とし、糖度13度以上、クエン酸1%以下を目標とする。なお、鳥害や寒害防止のため袋掛けを実施する場合は、10月中旬以降に行う。</p>  <p>写真2 JA西宇和川上共選の小太郎</p>
<p>( 5 ) 極早生・早生温州の秋肥施用</p>	<p>秋肥は果実生産で消耗した養分を補給し、樹勢回復、耐寒性向上、翌年の花芽分化を促す。秋肥は施用時期が遅くなると、地上部器官への移行が遅れるが、地下部器官へは吸収されていることから、適期を逃したとしても施用しておく。</p> <p>極早生温州は、収穫直前の10月上旬(10月中旬までに大部分収穫することを前提)と収穫後の11月上旬に分施して樹勢回復を図る。早生温州では果実の収穫を11月中旬までに終えるものとして、収穫最盛期の約3週間前に施用する。また、収穫後、窒素成分主体の液肥の葉面散布を数回行い、早期の樹勢回復を</p>

項 目	作 業 内 容					
(6)キウイフルーツの収穫	<p>図る。なお、乾燥が続く場合は収穫後灌水を行う。</p>					
	<p>表1 柑橘の秋肥・晩秋肥施肥基準 (愛媛県施肥基準)</p>					
	品種名	目標収量 (t/10a)	施肥 時期	施肥成分量 (kg/10a)		
				窒素	リン酸	加里
極早生	4	10 月上	8	6	6	
		11 月上	5	3	3	
早生温州	4	10 月下	11	7	7	
<p>果実の糖度は、これまでのデンプンの蓄積量と収穫1～2か月前の水分ストレスによって左右されるため、10月は灌水を控え、乾燥ぎみに管理する。ただし、落葉させると逆効果になるので樹相を十分観察しながら対応する。今年</p> <p>は受粉不良や花腐れ細菌病の発生などで着果量が少ない傾向にあり、肥大は良好で糖度の上昇は早い傾向であるが、早採りには特に注意する。収穫期の目安としては、未追熟果のBrixが6.5以上になってから収穫を開始する。</p> <p>なお、貯蔵中の灰色かび病の発生を防ぐため、収穫前日までに貯蔵病害防止の薬剤散布を丁寧に行う。</p>						
						
			<p>写真3 収穫間近のキウイフルーツ園</p>			